

# あ 技研ニュース

国際自動車工業振興協会 技術研究所

1993.11

No. 136

## 東南アジアで技術協力

兼松 弘

初めてフィリピンへ技術指導に行ったのが35年前、そして JICA (Japan International Cooperation Agency 国際協力事業団) が行っている技術協力の一環として表面処理の技術研修にお付き合いをしてきて28年が経ちました。それが奇縁で東南アジア諸国を廻ることができました。マレーシアでは、その周辺諸国を相手に1年置きに3回、電気めっき、溶接、金型、プレス加工の技術研修が行われました。筆者は、毎年1か月研修のめっきの講師として参加しました。マレーシアの国立工業技術センター MIDEC (Metal Industry Development Centre) で行われ、勿論全部英語でしたが、半分は現地の先生が研修の世話や講義を担当してくれたので、何とか切り抜けることが出来ました。日本で行う技術研修では、宗教上の問題でとかく研修生間に不満が出ますが、イスラム教徒が多いこの国での研修は、当方にとってこの点かえって気楽でした。

研修の日程のなかに工場見学がありました。緑の豊かな町並みが美しいクアラ・ルンブールの周辺にも工場群があります。筆者も研修生諸君と同行し、その日は勳章の調製工場に行きました。ここでは金銀めっき、七宝、塗装は当然行っていました。工場の水準としてはかなり高い方でした。見学の最中に、同行のマレーシア系の職員が、「私はこの様な工場がマレーシア人の経営者によって作られていることを誇りに思っています」と目を輝かしていたことを忘れる事が出来ません。

マレーシア、中国、インド系の人々が混在しているこの国で、主な経済、技術分野は中国人によって占められているものの、現実にはマレーシア系に優位になるような保護政策が取られ、同床異夢の想いもあちこちに伺える様です。

航空機整備工場の AIROD などでも同様の感触を受けました。

ご承知のディップソール ケミカルのめっき工場も異郷にあって素晴らしい施設を持っており、研修生の見学を受け入れていただきました。近年は日本より多くの進出企業がそれぞれ模範的な生産体制を整えています。円高格差の問題から、これらの進出企業の重要性は益々高まっている様です。

環境問題は、技術協力側の JICA でも力を入れていますが、当時は未だ、或るめっき工場では「自分の工場の土地なんだからクロム酸を棄ててもどうってことないじゃないの」と放言していた工場主も居りました。日本でもずいぶん昔にそんな台詞を聞いたことが有ったような気がします。

昨年に引き続き世界一と言われるようになった日本の ODA (Official Development Assistance : 政府開発援助) による技術援助については、とかく現地の实情に合っていないと批判されることがある様ですが、前記のマレーシアの工業技術センターは、多くの日本からの専門家の

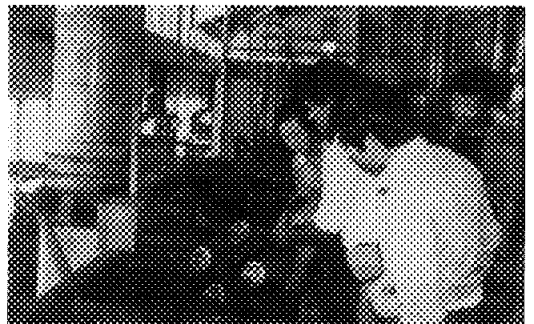


写真1 MIDEC でのめっき技術研修

方々のご努力によって、現在ではマレーシアの人達の手で活発に運用され、国の工業技術の発展に支えられて評判は悪くありません。

同じく2年前に JICA の技術援助が終了したタイのバンコクにあるタイ金属加工機械工業開発センター MIDI (The Metal-Working and Machinery Industries Development Institute) も、日本から多くの専門家が訪れ、タイ側の職員の指導が行われました。

只こうした専門家は、日本国内でも第一線で活躍しておられるベテランばかりですから、日本と異なるペースでの作業にはなかなか馴染めないのが頭痛の種なのです。おまけに、日本にきた研修生にも当てはまる事ですが、「CAD を勉強したい」、「基礎は教科書に書いてあるから、わざわざ講義してくれなくても」と口を揃えて主張するのです。

専門家の方々から見れば、「機械工作、製図の基礎すら身に着けていないのに」と言うわけです。

ひと頃、日本からの供与機材の中に、事務機として、コピー機が必ず入っていました。折角手に入れるものならば、と誰しも思うのですが、最新鋭の多機能機が設置されました。測定器や精密加工機と異なり、いろんな人達がこれを使うので、オーバーヒートして直ぐに調子が悪くなります。そうすると必ずと言ってよいくらい、これを分解して見たくなる代表選手がいるので、今度は本当に動かなくなって仕舞う様でした。

先日のゴムでの地震の際、さっぱり情報が入らなかったと言うことを、当時滞っていた日本人観光客が話していた記事を読みました。日本ではJRの列車の中でも、家庭のテレビでも色々速報が入るのに慣れきっているのに、外国では情報が得られない事に歯がゆい思いがします。

スリランカへ行って間もなく、その工業団地が停電でした。「さて、送電開始は何日になるのかねえ！」と言う調子でした。工場に寝泊まりして機械の設計をしよう

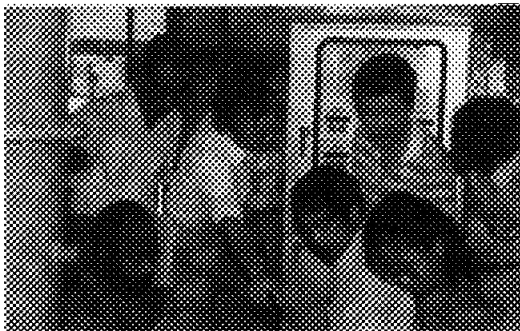


写真2 ディップソール・マレーシアのめっき工場の見学

と張り切っていた若い専門家は、水の出ないトイレにも行けずに困っていました。此処は、スリランカでの適性技術を開発し工業化して行こうと言う試験所でした。

ところで、今日本では過剰雇用あるいは社内失業と言われる時代ですが、「従業員不足は有りませんか？」と先日或る工場で伺ったところ、「最近外国人労働者が次々と来てくれるし、3Kにも心配いらない」と全く気に掛けていない様子でした。

労働省の関係の雇用促進事業団に属する海外職業訓練協会が外国人職業訓練アドバイザー制度を作っており、外国人労働者の受入れの際の言葉の問題始め、日本での生活、習慣等の教育についてもお世話することになっています。筆者もこの制度が出来た時からアドバイザーとして待機していましたが、未だ一度も出番がありません。企業は、それぞれの場で起きる問題は、自分で解決している訳で、これはこれなりに結構な事と思います。初めに書いたように、筆者の最初の海外体験はフィリピンでした。当時も今もマニラの工場には、マシンガンや小銃を持ったガードマンがいますが、その一人と色々話しているうちに、先の戦争の事になりました。そして、「赤ん坊を放り上げた日本兵が銃剣の先で突き刺した」と言う話を聞いた時は体から血の気が引きました。クアラルンプールの丘に立つ戦争記念碑の前で、外国の観光客達に、「私は日本人は嫌いだ」、「戦争中の事を忘れはしません」と日本兵の行為を声高になじっていたマレーシア人ガイドが居ました。8月15日になると何時もその事を思い出します。国外からは、先の大戦での日本人の蛮行が問われているのです。これまでに国外の人々に対して成すべきことが、戦争の否定よりも、遙かに上にある人間性の問題をこそ反省するのが日本人に料せられているのではなかったのでしょうか。

(筆者は、元愛知県工業指導所長・技術士)

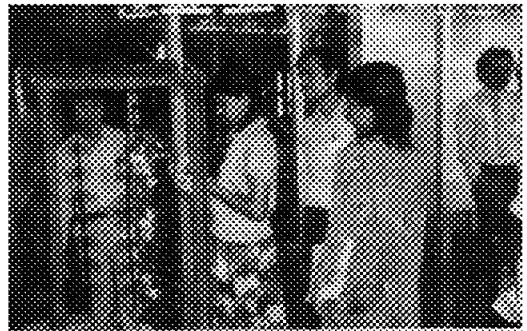


写真3 ディップソール・マレーシアのめっき工場の見学